気仙沼市立病院：大震災の中いかに看護を継続したか

3月11日14時46分、気仙沼市は巨大地震に見舞われました。気仙沼市立病院は築46～18年の建物が混在しており、職員らは建物の崩壊を考え、まず患者、職員に加え病棟の損壊の確認を行いました。幸い、一部の壁や配管の亀裂で済んだため、患者の受け入れ態勢を整えることにしました。

気仙沼市立病院は災害拠点病院として集団災害マニュアルを作成し、年1回以上の訓練を実施、2007年には病院全体でトリアージ訓練を行っていたため、地震から30分程度で初動準備が整いました。

その後、津波が来ることを懸念し、直ちに入院患者を高層階へ誘導・搬送することになりました。当時、災害マニュアルに津波は想定されていなかったため、各病棟患者の搬送先はその場で決め、誘導しました。

トリアージタッグを使った患者の受け入れは翌朝まで続きました。受け入れた患者数は、震災当日は64人、2日目175人、3日目435人で、12日間で1918人を数えました。震災当日に患者が少なかった理由は、瓦礫や汚泥のために、救急車による搬送ができなかったことによります。

患者の多くは海水につかっての低体温症や、重油混じり海水を飲み込んだことによる肺炎であり、トリアージ区分では緑か黄を判断されていました。また、津波による死因の95%以上は溺死であり、今回の震災の特徴として、赤のタッグを付ける患者がいなかったことが挙げられます。

震災当日の入院患者は368人（担送166人、護送101人、独歩101人、人工呼吸器装着患者4人）でした。ライフラインは何とか確保できていましたが、病院機能を100%維持することは不可能な状況だったため、翌日から、104人の透析患者をはじめ、合計209人の患者を安全な地域の病院に送り出しました。

また一方で、職員も被災者であり、自宅に帰る術がなく病院に寝泊まりする方が多数いました。人手が足りず、通常の3交代を2交代のシフトに変え、救急患者受け入れブースを担当した外来には夜勤シフトを導入しました。ガソリンが手に入らないことでさらに条件は厳しくなり、ガソリン券を配布したり、職員同士が相乗りして通勤したりして対応しました。家族を亡くしたり、家族の安否が不明なままだったりする看護師もいましたが、皆懸命に患者に寄り添いました。

時間が経つにつれて、家族の安否を尋ねに来る住民が増えたため、病院を訪れた患者については帰宅先やトリアージタッグの情報を名簿管理し、入院患者は名前と病棟名を掲示し、一刻も早く無事を確認したい住民への情報提供を行いました。

本来の業務ができなくなった各部門の職員や委託業者には、患者の誘導、医療器材の移動、汚れた床の清掃、不安を抱える妊婦への対応、治療が終わっても帰れない患者への援